

ゼミの活動紹介：みんなの食卓プロジェクトーおにぎりの会

梅澤佳子ゼミ プロジェクトリーダー 経営情報学部3年 横溝 侑哉

「みんなの食卓プロジェクトーおにぎりの会」は、多世代交流と食育をテーマとして2014年度に始まり今年度5年目を迎える梅澤ゼミの地域プロジェクトです。目的はみんなでおにぎりを作ること、大勢で食卓を囲むように食べること（共食）の美味しさ楽しさを分かち合うことです。活動は多摩市立聖ヶ丘コミュニティセンター（通称：ひじり館）の運営を受託している聖ヶ丘コミュニティセンター運営協議会、多摩市立青少年問題協議会連光寺・聖ヶ丘地区委員会、地域有志のみなさんと連携して行っています。2014～17年度までの4年間17回の活動には、のべ640名の幼児・児童・保護者や高齢者を含む地域の方々にご参加いただいています。

2018年度も多摩市食育推進事業の一つとして5回の開催が決定しています。第18回は5月20日（日）に開催し、児童23名、幼児1名、大人11名、我々スタッフ12名、計47名で活動を行いました。5月は小学校新1年生とその保護者の参加が多いのですが、今回は父親の参加が目立っていました。

（活動内容）

活動内容は幼児から高齢者まで多世代が一堂に集まり、手洗い→お米を研ぐ→炊飯→おにぎりを握る→みんなで食べるというものです。聖ヶ丘小学校農園ボランティアの方から毎回農業に関するお話もあり、子どもたちも大人も楽しめるプログラムとなっています。また、秋には子どもたちが小学校で育て収穫したお米でおにぎりを握ります。

学生の役割は、小学校・ひじり館に掲示するポスターの作成、申込書の作成と配布と回収、前日のミーティング資料・当日のプログラムの作成、当日の会場設営・撤収、司会、記録、おにぎり作りの手伝い、雑用、アンケート調査、報告書の作成です。青少協の方々、当日の受付、おにぎりのグループ分け、おにぎり作りの手伝いです。ボランティアの方はおにぎり作りのすべてを段取り、教えて下さいます。

（活動からみえてくること）

当初の目的は子どもと高齢者の交流でしたが、実際に活動が続けていくとこれまでひじり館に足を運ぶことのなかった若い父母の方達も子どもと一緒に参加して下さり多世代交流がさらに広がりました。最近父親の積極的な参加が目立つようになってきました。積極的というのは、調理や洗い物、後片付けなど行ってくださることです。

連光寺・聖ヶ丘地区も他の地区と同様に高齢化が進み、ひじり館も

高齢者対象のプログラムが中心となる中で、本プロジェクトは地域の子どもたちを含め多世代を対象とするプログラムとして認められているようです。「お米を洗う時は洗剤を入れないの?」「家ではほとんど食べないのに今日は4つも食べた。」という子どもからの質問や声、「家では親の方もおにぎりを握ったことがない。」「お米は洗うもので研ぐものと思わなかった。」「自分の子どもがこんなに出来ると思わなかった。」「家では子どもと料理をするゆとりがないけれど、今日は家族全員でおにぎりを作れました。家でもやります。」という親御さんの声。「学校とは違った子どもたちの表情や活躍を見ることが出来る。」と校長先生、副校長先生も頻りに参加して下さいます。

みんなの食卓プロジェクトは外部からの取材や見学者が多く、NHKBSプレミアムTOKYOディープ「東京のタイムカプセル多摩市」や多摩ニュータウンのタウン誌「もしもし しんぶん」等で紹介されました。私は昨年11月に開催された（公財）東京市町村自治調査会多摩交流センター・東京TAMAタウン誌会共催「若い力と市民団体の連携を考えるシンポジウム」にて活動を発表し、グループワークの原稿を取りまとめました。

また、志企業会社案内プロジェクトに参加し会社案内を作成しました。プロジェクトに参加したことがきっかけとなり、地域密着の信用金庫に興味をもったことから、今年は「たましん学生塾」に参加させていただくことになりました。ゼミの活動を通じて多くの人と接し、交流し、意見交換することができ、行動範囲が広がっていきます。

（ゼミ内で問題解決！ゼミが一枚岩になった）

昨年度、みんなの食卓プロジェクトは、4年生から我々2年生が引き継ぎました。春学期に4人だったPJメンバーの内3人が転ゼミし、秋学期にはひとりになりました。私は本プロジェクトに対して社会的意義があると思って担当していたので、自分から「ひとりでもやり通したい」と梅澤先生にお伝えしました。ゼミでは3つのプロジェクトが動いており、これまでは、大きなイベント以外はプロジェクト毎に活動を行っていましたが、ゼミ内で話し合い、これを機に活動は2・3・4年全員が全プロジェクトに参加協力し発展させていこうということになりました。今年もいろいろな展開がありそうですが、充実した学生生活にしたいと思います。



心をこめておにぎりを握ろう



みんなで作って食べるおにぎりは格別！



シンポジウムでのグループワーク（筆者：中央）

「デジタル時代のメディア実践」の現場から

家族を“撮って”見えた大切なもの

経営情報学部3年 高島 奈那

「皆さんにはおじいさん、おばあさんはいらっしゃいますか？」と聞かれても、一体なんだろうと思われるでしょうね。私はこの授業を通して、家族の大切さを深く感じる体験をすることになりました。

授業で「デジタル・ストーリーテリング」という手法を使って、現実に取り組みました。自分で企画を考えて、スライドショー形式の作品に作り上げるというものです。

企画を考える?! どうしよう、と思ったとき、家族、それも80歳と76歳の祖父母のことが浮かびました。いま高齢化社会が大きな社会問題になっていますが、私の祖父、祖母はとても元気です。そうだ、二人が毎日どんな生活を送っているのか、どこに元気の秘訣があるのか、それを探ってみようと思ったのです。

結論から言えば、「笑うこと」と「食事をする」とが元気の秘訣でした。撮影をした日は偶然にも祖父母たちと母と弟と一緒に夕食をとるようになっていて、祖母は「みんなで食べるご飯は楽しいね」と言いました。こうした、何気ない会話や笑い合うこと、それは私たちにとっても祖父母たちにとっても、とても幸せなことなんだと伝わってきました。

二人が畑仕事をしている姿、家族一緒に食事をとる様子…。普段は撮らない風景を写真や動画に収めることは、新鮮でした。初めての経験だったので少し恥ずかしさもありましたが、その場の雰囲気、どうすればありのままに伝えられるのかを一生懸命考えました。自分の頭でイメージしたことを場面として具現化することはそう簡単ではありません。随分苦労しました。

また、作り上げていくうえでは、音楽とナレーションを思うようなタイミングで一致させることが大変でした。しかし、完成した時には、私自身驚くほど完成度の高い作品になったと、思いました。作品を祖父母たちに見せただけには、何度も何度も再生し、「ご近所の人たちにも自慢したいぐらいだ」と褒めてくれました。このとき、私は、本当に作ってよかったと心底思いました。

教室で作品を見ることになり、映し出されたときには本音を言う、凄く恥ずかしい思いでいっぱいでした。でも、友達が「すごく良かった」「感動した」などと声をかけてくれたことでとても嬉しい気持ちになりました。

家族というテーマは一言で表せないため、決して簡単ではありませんでした。いろんな家族のあり方があり、私たちの家族は互いに尊重し合い、愛し合うことで成り立っているのだなと思いました。そして、祖父、祖母が元気で長生きしてくれている秘訣は「笑うこと」や「食事をとること」だけではなく、私たちの存在や「コミュニケーション」が重要で、祖父母たちと向き合うことが大切なのだ、この作品づくりを通して感じました。

今回の映像作品作りを通じて、周りの誰かに、文字だけでは伝えられないことを伝えることができる有能なツールの一つであることを学びました。正直、これまで大学の授業ではあまり「楽しい」と思えることがなかったのですが、この授業で「楽しい」と心から思えました。なによりも、改めて家族の大切さに気づくことができ、私の大切な「宝物」となりました。



みんなで温泉スパ、幸せタイム!(筆者左から2人目)



祖父、祖母と向き合った作品づくり

制作にチャレンジ、達成感に感動

広東財経大学3年(交換留学生) 韋 嘉權

春学期、もう2単位取りたいなと考えている時「メディア」という言葉が目に入ってきた。今中国では、WeChat(微信)など、自分の経験したことを文字や音声、画像で他人と分かち合うプラットフォームが流行っていて大勢の人たちが参加している。WeChatはユーザーが6億人をこえると言われる個人メディア(SNS)だ。「産業社会特講・メディア新時代の情報表現」、面白いかもしれない…。

こうして見つけた授業はどんな「新世界」なのだろう。教室のドアを開けて驚いた。教室満杯の学生、席も足りないぐらいの大人数というのが第一印象だった。

デジタル・ストーリーテリングに取り組むことになった。作品に触れたことはあったが、自分で実際に創ったことはなかった。しかし、面白そうなのでぜひチャレンジしようと思った。

企画を考えることになって、はじめて取り組むのだから、自分にとって一番意義のあることをテーマにしたいと思った。すぐに自分の「通訳バイト」のことを思いついた。このアルバイトは自分の人生の交差点とも言えるもので、私が日本に留学できるのもそのおかげだからだ。

デジタル・ストーリーテリングというのは、映像はスライド構成で作るのだが、自分の語りを付ける必要がある。写真と声、この二つの要素だけの一見単純な作業だが、実際に作るとなると、写真の順番と話の道筋をいかによく組み合わせるか、思った以上に苦労した。また、どんな言葉で表現すればいいのか、散々悩んだ。

写真は、これまで撮りためた携帯の画像を活用することにした。一枚一枚の写真が映画のように頭の中に再生されていった。真剣に仕事に没頭していた姿、仕事以外のときはリラックスして仲間たちと楽しんだこと…、記憶をたどると、前には気づけなかった「何か」を感じた。心を込めた芸術品を作るような思いで打ちこんでいる自分に気づいて、私は感動した。この経験は今まで生きてきた世界と全然違う!こんなに眩しいものだと、と驚いた。

最初は作り上げることができると不安だった。木村先生から、自分で考えて、自分で動くことが大事だと言われていたので、ネットでいろいろ作品例を見て、作り方を調べて、なんとか作り上げた。そして、教室で、作品をみんなで見るようになった。初めての作品で、正直恥ずかしかった。でも、教室で見た学生から「すばらしい」と評価されてうれしかった。言葉にできない達成感を感じることができた。なんだか自信が湧いた。自分にとっては大きな一歩を踏み出したと思った。

同時に、他の人の作品を見てよくできているなと感嘆した。特に、自分のおじいさんとおばあさんを紹介した作品が印象深い。写真と音声だけでなく、動画と写真を組み合わせて、BGMの選曲と音量の調節がほどよく、こうした要素があって作品がさらに人の心を動かすのだと、よくわかった。

この授業のおかげで実に大切な体験ができたと思う。今後、社会人になって職場でも、人との付き合いでも、言葉だけでは足りないことを、こういう形で伝えることができれば、効果抜群だと思う。そして、中国に帰ったら、この授業で学んだことを生かして、SNSなどの個人メディアでもさらにチャレンジしたいと思っている。



人との出会いが宝に(筆者:後列左から4人目)



通訳で人と人の架け橋に

授業じゃない勉強

グローバルスタディーズ学部4年 西田 良太

「人格者は広く交流する。徳のない人物ほど一部に固まる」これは中学や高校で習う孔子という中国の思想家が残した言葉である。今の私には容易に理解することが出来るが、3年前の私では理解することができなかつただろう。そこで今回は、どのようにして大学生生活を過ごし、どのようなことを意識したのかを私なりの哲学を用いて綴りたいと思う。また、需要があるかは分かりかねるが、私なりに後輩へ簡単なアドバイスをやりたいと思う。

高校3年生の12月ニュージーランドでの1年間の留学から帰国した私は、大学選びに悩んでいた。そもそも、大学のことをよく知らなかったのだ。そこで、担任の先生にはなるべく楽をするために指定校推薦で行ける大学を探してもらった。そこで見つかったのが多摩大学だ。留学のこともあったのでグローバルスタディーズ学部を何となく選び、何となく入学を決めた。

入学してからも自堕落な態度や性格は変わらず、それでいて授業にだけはしっかりと出席するという地味な学生生活を送っていた。生き活きとしていたのは、せいぜい大好きなガンダムのお話をするとときくらいだった。そんな生活を繰り返していた私だったが、この3年間で自分でも驚くほど変わったと思う。

きっかけは2015年の11月に多摩大学と藤沢市、藤沢市観光協会が「観光連携等協力協定」を結んだことだった。この協定を結んで以降、藤沢市における多摩大学生の活動が格段に増えた。幸運にも様々なイベントやプロジェクトに参加させていただいた。藤沢市のレストランやお土産店のメニューを多言語化する「多言語メニュー」や他大学や近隣の中高生、地域住民と共に行った「ぶらりごみ拾い」江の島が2020年の東京オリンピックのセーリング会場として選ばれたことに関連して参加した「沖縄名桜大学研修」など、昔の自分からは想像もできないほど様々な活動に参加した。学内においても成り行きとはいえ学生会長や学園祭実行委員長を務め、寺島実郎学長のインターゼミにも参加した。こうして自分の3年間を振り返ってみると、正直自分でも自分を誉めたくなくなるくらい色々やったと思う。

私がこの3年間頑張れた理由は何なのか考えてみた。答えは単純だった。「やってみる」「考える」「感謝する」それだけだった。

私の口癖は「めんどくさい」だった。何をやるにも面倒くさいと言い訳した。面倒くさいという言葉は非常に便利で、自分に何も能力がなく自信もないから逃げているだけなのに、面倒くさいという言葉を使うことで能力は足りてるが、ただやる気がないだけに聞こえる。実際はただ、臆病で逃げているだけなのだ。私は自身を情けないと思った。その日から「めんどくさい」をやめた。

能力に自信がなくても何でもやってみた。少しずつ自分の世界が広がっていくことが実感できた。「やってみる」ことで能力も自信もつき、なによりも可能性を殺さなくて済んだ。

自分への言い訳をやめてから私は疑問を持ち始めた。「どうしてこんなことをやっているのだろうか？」だ。この「なぜ？」があるかどうかで物事への取り組み方が大きく変わる。孔子の言葉にこんな言葉がある。「学びて思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し。」やっているだけで自分の考えと結び付けなければ意味がなく、考えてばかりで学ばなければ独りよがり危険である。私は、ただ何も考えずやっているだけならAIのほうが効率的。同時に、考えてばかりで行動をしないのであれば全く意味がない。やることと考えること両方を意識して初めてひとは成長し、使命感や責任感を持つことが出来るのだと思う。

私は「どうしてこんなことをやっているのだろうか？」その答えは簡単に見つかった。それが「感謝する」だった。様々な活動をやってくれたのは、全て誰かへの感謝の気持ちが原動力になっていたからだ。お金を出して大学へ通わせてくれている親、懐いて慕ってくれる後輩、そして何よりも私に目をかけて様々な機会をくれた先生の存在が非常に大きい。いつも誰かがチャンスを与えてくれた。だからこそ自慢の息子でいたい、慕われる先輩でいたい、安心してもらえる教え子でありたい、そんな押しつけ感謝が私の原動力だと思う。

「やってみる」「考える」「感謝する」と偉そうに述べてきたがこの3年間で達成できたとは思えない。残りの1年間で出来る限りのことをしたい。今年はすでに6月に行われる湘南日中友好協会に参加し、パネリストとして日本と中国の友好についてディスカッションを行うこと、8月にはSGSの学生としては初の雲南民族大学への交換留学することも決まっている。この1年間で親との約束を果たし、学生としての責務をしっかりと果たしたいと思う。

最後に、正直に言うと多摩大学は突出して良い大学というわけではありません。しかし、自分の意識や行動次第でどの大学にも負けない良い大学生活を送ることが出来ます。そのためには良い出会いに気付いてください。私は誰よりも尊敬できる先生に出会えました。出会えたことに気付きました。そのような機会をふやすために沢山の物を見て広く交流してください。私はもうすぐ卒業ですが、皆さんが自分自身の可能性をもっともっと広げられるように祈っています。



母と私



安田震一学部長 還暦祝い



かわいい後輩たちと私

2018 年度学生会執行部役員・多摩祭実行委員会役員紹介

学生会執行部

部長：田島 凜太郎（2年） 副部長：廣野 樹梨（3年）
会計：中林 亮太（2年） 書記：萱間 慶美（2年）

多摩祭実行委員会

委員長：渡邊 健史（3年）
副委員長：奥山 孝亮（2年）・中林 亮太（2年）
企画渉外部長：三浦 麻子（2年）
総務部長：飯塚 ちひろ（2年） 広報部長：永井 健（2年）
装飾編集部長：田島 宏基（2年） 会計部長：井上 綜太（2年）



経営情報学部学生会執行部一同

今年度は、このメンバーで経営情報学部を盛り上げていきます。皆様のご支援賜りますよう宜しくお願い致します。

学生会執行部主催 留学生歓迎会

経営情報学部学生会執行部 部長 2年 田島 凜太郎

4月2日（月）に学生会主催で留学生歓迎会を開催しました。韓国や中国から多くの留学生がこの多摩大学に来てくれるということで、私たちはとても楽しみでした。前日に留学生歓迎会で振る舞うためのお菓子などの買い出しや、当日も会場の準備や飲み物の準備など、留学生を迎える用意をしました。

歓迎会では留学生と多摩大学の学生や先生方が食事をしながら仲良く交流をすることが出来ました。留学生の皆さんからも話を聞くと「楽しかった」「多摩大学楽しそう」などの声を聞くことが出来たので、学生会としても留学生をサポートしつつ、送別会も盛り上がるような企画を考えたいと思います！



留学生歓迎会

学生会執行部主催 サークル合同説明会

4月9日（月）・10日（火）の両日に学内の食堂にてサークル合同説明会を開催いたしました。説明会には経営情報学部の部活や委員会、サークルなどの学生団体の皆さんに参加していただきました。学生会執行部としては、より多くの1年生にサークルに興味持ってもらい、入会してもらえるように、学内に説明会のポスターを掲示し、当日のお昼休みに学内放送をするなど、説明会の告知をしました。そのかいもあり、説明会には2日間で150名以上の1年生に来てもらうことが出来ました。

説明会では各サークルの上級生からの説明を真剣に聞く1年生や、和気藹々と仲良くなっている1年生も多く見ることが出来ました。また、各サークルの皆さんからは「1年生がたくさん入ってきてくれた！」「また、やってほしい！」などの意見を聞くことができたので、学生会執行部としてはとても満足のできる結果だったと思います。



サークル合同説明会の様子

多摩祭実行委員会今年度の活動目標

多摩祭実行委員会委員長 3年 渡邊 健史

多摩祭実行委員長の渡邊です。一年生の時は暇つぶしで入ったこの委員会も三年目を迎えました。

今では日々の活動に情熱と責任を持って取り組んでいます。今年度の多摩祭は記念すべき第30回となります。テーマはこのことにちなんで「パズル～俺たちのつくった30ピース～」となりました。

当日来て下さるお客様はもちろん、在学生や先生方も楽しめるような企画盛り沢山の多摩祭を目指しメンバー一丸となって頑張っていきます。

一年生のメンバーを加え、新しくなった多摩祭実行委員で創り上げる多摩祭にご期待下さい！



多摩祭実行委員会一同